

〔シユプリングァー・フェアラーク東京、東京都文京区本郷三一三
七―三、電話〇三―三八二―〇三三二、A五判、xi、三四一
ページ、一九九一年七月三〇日発行、定価二〇〇〇円〕

宗田 一著『渡来薬の文化誌』

医学史・薬学史の権威である宗田一氏がこのほど『渡来薬の文化史』と題する書物を東京の八坂書房から刊行された。

著者が十数年にわたって『医療ジャーナル』誌に連載された論考の中で、近世日本に輸入されて洋薬に関する論者をまとめられたものである。十六世紀から十九世紀に至る間の渡来薬を通じてみた日本の文化史、社会史を達意の筆で綴られたもので、とりわけ書簡や触書などの一次資料を豊富に使用することによって現実感をもりたてている。

たとえばコロンブス一行によってアメリカからもたらされた梅毒が十五世紀以後ヨーロッパで流行した時のポックホウト、水銀剤、さらに中国、日本で開発されたシナ根こと土茯苓などの使用された経緯が詳細に記されている。

また幕末の安政五年（一八五八）にコレラが大流行した折の幕府の触書が紹介されているが、貴重な一次資料というべきであろう。この折に幕府が推奨した薬の一つに芳香散というものがあつた。これは桂枝、益知、乾姜から成る内服薬と、芥子泥、鰹鮓粉から成る外用薬であり、これらに関する考察がなされている。

また本書には稀覯本である『遠西名物考』なる書物が紹介されている。これは宇田川玄随の著書であり、しばしば類似名である『遠西医方名物考』と混同されるという。後者は宇田川玄真・榕庵の著書として広く知られており、筆者もしばしば参考にさせていたが、『遠西名物考』なる書物については恥しいことだがこれまで知らなかった。宗田氏によると『遠西名物考』は宇田川玄随の著書『西説内科選要』に収載されている薬物の解説のために編集されたものであるという。

一方、宇田川玄真・榕庵共著の『遠西医方名物考』は宇田川玄真・榕庵共著の『増補重訂西説内科選要』に対応する薬物書であるという。そんなわけで、きわめて稀覯本に属する『遠西名物考』が紹介される意義はきわめて大きい。

そして、巻末には享和三年（一八〇三）に著わされた中島真兵衛の『舶来諸産解説七拾条』が載せられている。これも当時の洋薬に関する貴重な資料というべきであろう。

（大塚 恭男）

〔八坂書房・東京都千代田区猿樂町一―五―三・電話〇三―三三二
九三―七九七五、一九九三年発行、A五判、三三四頁、三二〇
〇円〕

小林健二・宮川浩也編『素問・靈枢 総索引』

『素問』と『靈枢』が中国系伝統医学のもっとも重要な古典

であることは言うまでもない。古くは後漢時代ころから医学の典拠とされ、その一字一句は現在もことあるごとに取り挙げられる。まさしくバイブルである。それゆえ中国文化圏のみならず、今は欧米でも読まれており、各種研究は膨大な量に達している。

ただ、この両書には困った問題が少なくない。ルーツは紀元前に溯るため、難解な語句に富むこと。著者も一人や一流派ではなく、しかもかなり長い期間にわたっていること。少なくとも数段階以上を経て出版物となったが、伝写本時代の原本は一つも現存していないこと。初版本もすでになく、のちの良質とは認め難い翻刻本による研究が大多数であること。などなど……。

しかし両書にあたって調べたり、読まねばならないことは実に多い。ともかく医用語の古い用例の宝庫なので、必見の書である。先日も「虚弱」の表現のルーツさがしを依頼され、『素問』にその早い用例があり、虚は気の、弱は身体の衰えであることを知った。あるいは医療方法、思想のルーツ的記述も多い。

こうしたとき原本や解説書をめくっても、その文字量ゆえ完璧はとうてい期しがたい。頼るは工具書となる。両書の語句索引はこれまでもなくはなかった。早くは幕末に山田業広が『医経声類』を著しており、ここ数十年になって日本・中国から編集方針を異にした索引書や辞典が出ている。しかし、いずれにも完璧性や使用底本の善本性等で、不安を覚えずに

はいられなかった。

このたび出版された当索引は、その多くの問題をクリアしている。『素問』『靈枢』ともに底本は現存書中、最善の版本を使用すること。その全経文をコンピュータ処理し、一字索引としたこと。当該字の前後の経文も示し、その所在を巻・丁・丁のウラオモテ第幾行まで示したこと。親文字を音訓と画数の三とおりで検索できること。コンピュータ出力により印字していること。これらにより典拠文字の信頼性、検索の完全性、誤植の排除、利便性が達成された。いずれにおいても、従前の工具書をはるかに凌駕したと評してよい。じつさい私もしばしば利用し、実に重宝している。幾度となく舌もまいた。

ただ漢字の専門家からすれば、まだ問題もあるう。コンピュータ出力のためJIS漢字を使用せざるを得ず、その複雑な問題をかぶってしまった。それでJIS漢字以外の外字を含め、正字と略字で同じカムリやヘンでも形や画数の異なる二種が混在する場合もある。あるいは原本に忠実にコンピュータ入力しているため、その誤刻、己・己・巳や搏・搏などの無区別を踏襲している。これらは注意しておかねばならない。

音訓索引にも若干の難点がみられるが、いずれにしても本書の利便性、完璧性をいささかも損うものではない。欲をいえばピンインによる親字索引も付けてほしかった。『素問』『靈枢』の利用者・読者が圧倒的に多い中国でも、本索引が使用

されるべきだからである。しかし、そこまで良くなると海賊出版や盗作される可能性もありえよう。無責任に言えば、それはそれでいいことかも知れないが。

ともあれ労力をいとわず本索引を完成させた編者の先見性と熱意は、ただものではない。おかげで『素問』『靈枢』も、十倍は楽に楽しく使用できるようになった。こんな果実を人々に公開してよいのか、とも思うほどである。安直な利用者ではあるが、当索引の完成と出版を心から喜びたい。

(真柳 誠)

〔日本内経医学会、東京都豊島区南池袋二一四一―マンション池袋三〇三、電話〇三―三九八三―七六四七、一九九三年、B五判、九一四頁、定価三五〇〇円〕